

平成28年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価書

| | | | 本年度の活動 | 具体的な手立て | 達成状況 | 成果と課題 | 学校関係者評価 | 今後の改善点 |
|------|-------|---------|---|--|--|---|---|--|
| 教育研究 | 公開研究会 | 日々の研究 | <p>「ともに学びともに高めあう学校の創造」～生徒が夢中になる授業づくり～」</p> <p>【ミニ公開研】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月20日に開催。 ・HPや津・松阪・鈴鹿市内中学校にメールでお知らせ。 ・現在進んでいる方向がこれでよいのか、公開研当日の授業の方向性の確認。 <p>【公開研究会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月13日 公開研究会開催。 ・参加者目標400人。 ・日々の研究の様子を県内外の先生方に見ていただき、助言をいただく。 | <ul style="list-style-type: none"> ・11月にむけた日々の研究の充実 ・ミニ公開をうけて、8月に紀要作成 ・年間計画を作成し、計画にもとづいた研究、公開研準備の実施。 | <p>【ミニ公開研】（体育は28日に実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者75人（助言・司会25人、一般32人、四附18人） ・HPやメールで広く呼びかけたこともあり、県内外のたくさんの方に見に来ていただくことができた。 ・各教科で現在の研究について検討し、公開研にむけての話し合いをもつことができた。 <p>【公開研究会】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者289人（特別来賓8人、講師・助言・司会26人、来賓79人、一般70人、学生8人、学生ボランティア62人）+育友会ボラ89人 ・「夢中」というテーマを手掛かりに遠くから参加していただいた人もいた。 ・参加者アンケートでは、「満足」の評価をたくさんいただいた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・1人教科の教科部会については、昨年に続きうまく運営できなかった。ただ、紀要や指導案作成などの時間の保証としては機能していた。 ・目標には達成できなかったが、多くの方に来ていただくことができた。また、学生ボランティアをはじめ、学生の参加が増えた。このことは、大学との連携がとれてきたことであると考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・先生方の日々の取り組みの積み重ねが公開研究会につながっていると感じる。 ・附属中学の存在の性格上、公開研究会などを積極的に開催し、地域の教育の模範となっている状況は大変好ましいことだと思います。 ・公開研の授業は、それぞれ大変工夫されていると思いました。 ・紀要や指導案はHPなどに公開できないものでしょうか？当日タブレット端末で閲覧する（資料配布しない）参加者は、参加費割引など考えられませんか？ | <ul style="list-style-type: none"> ・附属の研究を積極的に発信 HPの更新 研究だよりの発行 → 地域貢献 ・次期研究テーマ 全員の総意で ・ミニ公開研の実施 公立中学校へも参加の呼びかけ |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体となった授業づくりを行うことにより、学びに対する意欲を向上させ、学力向上を図る。 ・個々の生徒が互いにつながりあい、「ともに学びともに高めあう」ことへの取り組みを通して、教科の学びの本質に迫る授業を創造する。 ・教育学部との緊密な連携のもとに、校内研究を推進する。（協同教育学会との連携も含む） ・一人1回以上のべ50回以上の授業公開を行い、生徒一人ひとりの学びを大切に授業づくりを努める。 ・文部科学省や県教育委員会が主催する各種講習会・説明会、県内外を問わず先進的实践を行っている学校等への視察を積極的に進めるとともに、その成果を校内で還流し、喫緊の課題、先行研究等について共通理解を図る。 ・教育実習の取り組みや、外部からの研修会講師招聘の要請に応えることで、教職員の資質の向上を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・計画にもとづいた年間20回の全体研究会の実施。 ・1学期1人1回以上の公開授業の実施。 ・年間60回以上の公開授業 ・教科間での検討の時間を増やし、「夢中」のかたちをすりあわせていく。 ・県総合教育センターの初任者研修における、必修研修(授業公開と教科別研究会)の1日を担当。 ・文部科学省や県教育委員会の主催する各種研修会・講習会へ参加する。 ・県内小中学校、市町教委、県内各種研究会からの要請に対し、講師を引き受け、教職員の資質向上を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・全体研究会は計画通り実施している。 ・初任者研修等とリンクして自らの研究の機会とすることができたが、事前の指導案検討などにさらに注力すべき余地がある。 ・文部科学省や県教委の主催する研修会、指導主事等連絡会議で研修できたことは附属教員としての見識をふかめることになった。ただし、それを本校の研究活動とどのようにつなげるかという視点をもって今後取り組む必要がある。 ・教科部会の充実だけでなく、その内容の交流の時間を多くとった。各教科で同じ方向をみて研究を進めていくことができた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「夢中」を研究することにより、生徒の姿をよく見て、授業を振り返る教員が多くなった。職員室でも授業に関する話題が増えた。 ・「夢中」に関連する生徒の意欲にかかわる部分については、これからも継続して研究していく必要がある。（次期学習指導要領との関係も含めて） ・研究に関する総括は、これから年度末にむけて行っていく、次年度からの方針を今年度中にたてる。 ・学習指導要領の改訂をにらみつつ、今後どのような教育活動を作っていくべきかについて、一定の成果はあり、教員の知見も深まった。授業力の向上についても様々な機会をとらえて取り組み、公開研究会の参加者からの評価も概ね良好であった。 ・上記のような成果はありつつも、次期の学習指導要領の方向性への理解をさらに深める必要がある。また、それを実現していくための、さらなる授業力の向上を図る。 ・附属中学校の果たすべき役割を考えた場合の、県教委との連携の必要性がある。 ・教員の自主的な研修が少ない状況がある。自ら学び、考え、実践する自主性を高める必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「夢中」のかたちは抽象的なようにも感じたが、教科の本質に迫るものであり、意欲にかかわる部分でもある。自らが課題を発見し深く追求し、他者とのつながりの中で課題解決していく姿勢を身につけられるよう、社会的構成主義の考えにたつた教育姿勢は大切である。 ・「夢中なることができる授業づくり」とはやや観念的な表現ではありますが、理想的な授業の状態だと思います。そして、その具体化について各種の研究がなされているようで良いことだと思います。 ・大学の先生と一緒に研究できるテーマ設定や授業づくりを考えてはどうか。 ・「アクティブラーニング」という表記があったほうがよい。 | <ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫・連携の推進 ・大学との連携 助言者から共同研究者へ ・次期学習指導要領の先行研究 道徳 アクティブラーニング |
| 学習指導 | 少人数指導 | 学習環境の整備 | <ul style="list-style-type: none"> ・数学科(1, 2年)では、TTによる授業を行っている。法律で規定された学力の定義、①基礎的・基本的な知識及び技能の確かな定着、②それらを用いて思考力・判断力・表現力を高め活用力を育むこと、③主体的に学習に取り組むこと、のうち、①③に特に着目し、バランスよく指導している。②については、生徒は自信をもっている状況が、全国学力・学習状況調査の結果に表れていることから、特段①③に意を注いでいる。 英語科 ・1・2年英語科において少人数学習を取り入れ、それぞれの生徒に適切なきめ細やかな指導を充実させる。 ・学習習慣の定着や自律して学ぶ態度を養う。 ・文法指導と本文クラスに分かれて授業を行った。 ・個に応じた指導をすると共に、小グループで学習する機会を設定した。 ・1年、2年の数学科において、TTによる授業を行い、個に応じた指導の充実を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・数学科では、T1がメインで授業を進める中、T2が全体の雰囲気や勘案しながら、授業にストップをかけたり、理解できたもの十分な納得に至っていない生徒の人数を把握しながら、極論や反対意見を生徒に代わり代わって発言したりして、授業のメリハリを付けながら、生徒の思考を進めるなどしている。行き詰まっている生徒への助言はT1,T2とも発見した側のTが適切に行うよう心掛けている。 ・英語科においては、1年生で少人数学習を取り入れ、中学校で初めて学ぶ英語科について、中1ギャップの視点で支援し、小学校外国語活動との円滑な接続ができるようにする。1クラス36名を教室と国際理解教室の2つのグループに分け、それぞれ英文法・新出語句を中心とした授業と教科書本文を中心とした授業を行う。今年度より2年生も少人数学習を取り入れた。2年生も1年生で少人数学習を経験しており、1年生と同じようなスタイルで授業を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・数学科では、全国学力・学習状況調査で、「何をどこまで説明したら相手に伝わるのか」について、話し手の意図を考えながら聞いたり、聞き手の理解に応じて工夫して伝えたりすることをテーマに出題されているが、この思考に弱みをもつことが明らかになってきた。T1＝聞き手、T2＝話し手、そして役割を入れ替わるなど柔軟な運用を進め、それらの思考の仕方や説明の仕方・聞き方を身に付けさせるよう工夫している。 （英語科） ・教室では、主に新出単語の発音・意味の理解、文法説明、プリント演習、グループ発表を行った。国際理解教室と四附連携室では、本文の読解説明等で授業は進められている。生徒たちは、交互に教室と国際理解教室を移動し、全員が同様の内容を受けることができるシステムになっている。 ・授業では、英語でのスキット（短い英語劇）や自己・他己紹介、プレゼンテーションの発表を全員に実施した。少人数であったおかげで、一人ひとりにきめ細かい指導を行い、どの生徒も、全体発表に積極的に取り組んでいた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・数学科では、数学の教材研究が元となって、互いに授業中にコメントしたり、授業を止めたりすることができている。T1、T2の打ち合わせは不要だが、教員の個としての深い教材研究が必要である。このように授業を行うことは、若手教員にとって研修(研鑽)の場となっており、附属学校の使命だと考える。このようなTTの運用の仕方は全国的には珍しく、対話型TT(略して、漫才型TT～ボケとツッコミの数学的な使い方)に意を注いで～)の研究を更に精度を高め、研鑽を深めていきたい。 英語科 ・少人数教育を行うことによって、全ての生徒に音読指導や練習ができ、より多くの生徒が授業で発言することができた。わからない生徒にも時間をかけて指導することができた。全員が発表する時に時間が短縮でき、全員の発表を行った後、別の内容を指導する時間が確保できた。 ・2人の教師が考えを出し合って、内容が充実した。 ・少人数教育で身につけた英語への意欲は、学年が進んでも生徒たちの中に残ると思われる。 ・2人の教師がそれぞれの教室で別々の内容を指導するために進度調整や内容確認を今後もする必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの先生方の個性が生きて、意欲的に取り組まれている様子である。今後も子どもの意欲、学力につながる取り組みを継続されたい。 ・物理的、費用的な制約があると思いますが少人数によるきめ細かい学習指導は落ちこぼれ防止やレベルアップに役立つことだと思います。 | <ul style="list-style-type: none"> ・数学・英語で実施 数学 対話型T、Tの推進 英語 少人数教育 |
| | | | <ul style="list-style-type: none"> ・聴きあい学びあう関わりの醸成 ・「ともに高め合う学び」を継続して推進し、生徒が夢中になる授業づくりを通して、生徒一人ひとりにとって、質の高い学びが実現できる学習環境を整える。 ・各種客観調査の導入とそれに基づいたPDCAサイクルの構築及び改善項目の精査 ・全国学力・学習状況調査をもとに、生徒の実態把握とその改善項目の実践を進める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・4人班を基本とした学習基盤づくり。 ・i p a dを100台、新規購入して活用することで質の高い授業づくりにつなげる。 ・全国学力・学習状況調査の結果を分析し、教科の内容や、生活習慣をはじめとした学習状況を、それぞれ把握し、改善する。 ・新学習指導要領に準拠したシステムづくりを進めるとともに、新学習指導要領の内容を実現するための研究会・学習会を継続する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な取組のおおよそを実施することができた。特に、授業における課題設定については、各教科教師間でかなりの検討を行い、共通理解ができた。 ・多くの職員がi p a dを積極的に活用し、指導方法の幅を広げることが出来た。 | <ul style="list-style-type: none"> ・概ね安心安全の学習環境を作れたように思う。生徒指導上も、学級づくりも全職員の共通理解のもと、活動できた。 ・学力調査の分析を職員会議に提案し、全職員で共通理解をはかることができた。 ・環境整備のために、教師自らが研修・研究に取り組み、少しづつではあるが現状改善をしていこうという姿勢が見られた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・環境整備への努力の姿勢が評価できる。 ・4人班の中でも一人一人が考える機会 ・昨今はITをはじめ種々な環境の進歩は目覚ましいものがあります。教育の現場においても極力それらを活用して効果のある授業を行なっていく必要があると思います。 | <ul style="list-style-type: none"> ・学び合う仲間が育つ学級・学年づくり ・I C機器の充実 i p a d テレビ会議システムの導入 |
| 教育実習 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・学級指導、教科指導等における実習生への指導を、教員個々の指導力向上の機会ととらえ実施し、日々の実践をふりかえり、事後にいかす。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教科指導を通して、授業のあり方を見直し、自身の授業力向上に役立てる。 ・教科指導を通して、新学習指導要領の言語活動の充実について、検討する。 ・実習生と生徒が関わり合う場面を観察し、生徒理解の充実をはかる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・場面場面で各学級、各教科担当からの細やかな指導ができており、そのことが自身を学級指導や授業を振り返る機会となった。 | <ul style="list-style-type: none"> ・大学と連携し、実習生個々もつ資質や、課題等を把握しながら指導にあたることができた。実習生への的確な指導を行う意味でも、教員自身がさらに指導力を高める必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・教育実習の指導に携わる先生方のご苦労や熱意に頭が下がる思いである。 ・将来の教育関係者の確保のためにも教育実習などを積極的に受け入れることは必要なことだと思います。 | <ul style="list-style-type: none"> ・実習中の生徒観察と生徒理解 ・他教科の授業参観（クラス担当） ・教職大学院における実習の在り方を実施校として意見を大学へ |

平成28年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価書

| | 本年度の活動 | 具体的な手立て | 達成状況 | 成果と課題 | 学校関係者評価 | 今後の改善点 |
|--------|---|---|---|--|---|--|
| キャリア教育 | 教科学習を通じたキャリア教育 学校行事を通じたキャリア教育 地域の人々や先輩から学ぶ | ・あらゆる教科教育の中で、生徒個々のキャリア形成を図る。 ・行事の中で自主的に生徒が企画し、活動する場面を設定する。 ・社会福祉協議会の事業を活用した職業体験学習や社会見学、修学旅行の取組を通して、地元の人々との交流や平和学習、資料から、人権や平和などに寄与する姿勢をもつことにより、生徒個々のキャリア形成を図る。 ・3年間を見通して、生徒が進路選択に至るまでの自分を見つめ直す機会を設定する。 ・本校のキャリア教育に関する保護者啓発を図る。 | ・「車いすバスケット」をしている方の講演会を実施し、働くことの意義や社会に貢献することはどういうことかを考えることができた。 ・1年生で初めて「職業体験学習」を実施した。福祉に焦点化して取り組んだが、福祉の意味、働くことの大変さを実感できた。 ・「職業調べ」「高校調べ」などを実施したり、さまざまな学年行事を通して、学んだことを学年集会や文化祭で発表したり、壁新聞を作成したりすることができた。 ・全学年でキャリアカウンセリング（教育相談）を行うことができた。 ・生徒会によるスマイルセッションでは、学年の枠を超えて学校生活や勉強の方法を話し合ったり、附中のハーモニーで歌う歌をお互いに聴き合い、アドバイスをし合った。 ・学年・学校通信やHP等により、本校のキャリア教育について発信することができた。 | ・「職場体験学習」を実施し、大きな成果をあげたが、教育実習と準備期間が重なり大きな負担増ともなった。年間計画を十分検討して実施時期を決めていくことが必要である。 ・各学年の発達状況に応じた進路学習を行うことができた。 ・キャリアカウンセリング、キャリア教育講演会を実施することができた。 ・本校のキャリア教育に関する保護者啓発が十分にできていない。 ・地域人材の積極的な活用を図る。 ・3年間を見通したカリキュラムの構築を行う必要がある。 | ・社会福祉協議会の事業を活用した職場体験学習が実施されたことは大きなキャリア教育の前進である。 ・学習教育の現場でも社会との関わり合いをもって教育を行っていくことは大切なことだと思います。制約や事前準備などが大変だと思いますが、職場の実体験は将来の職業について考える良い機会になると思います。 ・先生方だけで、無数にある職業や進路について、その素晴らしさや意味を教えることは難しいと思います。育友会や同窓会を通じて保護者やOBの協力を得られると良いと思います。 ・中学生の段階では開口を広くしておくべき（世の中多くの職業がある） ・将来、三重を支える人材を作るために、地域の職業を見せておくのがよいのではないかと。 | ・2年目である職場体験の実施 三重県社会福祉協議会との連携 ・大学と連携したオープン講座の実施 |
| 生徒指導 | 集団の育成と活気ある学級づくり 生活指導体制の充実 学習習慣の確立と授業の充実 諸活動への取り組みと充実 教育相談体制の充実 規範意識の醸成 | ・学級での係活動や班活動の充実を図り、生徒一人ひとりの活動の場を設ける。 ・家庭との連携を密にし、教師・生徒・保護者との相互の信頼関係の構築や共通理解に努める。 ・全職員が共通理解を深める機会を定期的に設け、統一した指導を進める。 ・生徒指導部会を定期的に関き、各指導部の情報交換や指導の徹底を図る。 ・基本的な生活習慣(礼儀、身なり、けじめ、時間など)の育成を図るとともに、規範意識を高める指導に取り組む。 ・養護教諭、スクールカウンセラーとの連携を密にして指導の徹底を図る。 ・学習規律の定着を図る。 ・生徒会執行部、生徒議会との連携を密にし、活動の活性化を図る。 | ・全職員であったることができていた。朝の挨拶から授業での見守り、休み時間の巡回等を全職員で取り組む体制が整備されつつある。 ・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制を構築でき、全体で共有する体制になっている。 ・学年団を中心として、問題行動については協働して解決できている。 ・学年や学校全体、SCに問題の共有や相談がしやすい雰囲気を作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持た。統一しようという意識が教職員の中に見られる。 ・また担任を中心として家庭との連絡をこまめに行えている。 | ・ある程度の共通理解は出来ているが、校則の表現が変わったことでこちらも柔軟に対応する必要もある。 ・職員会などで情報共有ははかられているが、日常的な他学年の情報交流は生徒指導部会を中心としているが、全職員で細かなところまで把握することは難しい。朝の打ち合わせを利用して必要なことは共通理解出来ている。 ・マニュアルの作成を含め、学校全体で共通認識を高めようという体制になっている。全体で共有する体制になっている。 ・生徒指導担当や学年主任、管理職の方に相談できる環境があり、大変有難かった。 ・マニュアル通りでは解決の糸口を見出すことはできない事例が多いが、個々の判断での行動ではなく、協働体制で対処できるよう努めていきたい。 ・学年、学校全体で共有や相談がしやすい雰囲気を作られている。学年での報告、連絡、必要に応じて会議を持た。 ・統一しようという意識が教職員の中に見られる。 ・SCとの話し合いの機会があるのでよい。 ・あいさつはよくできているが、よりできるようこちら側からの働きかけも大切である。 | ・教員間に風通しの良い関係があることが、大きく問題解決に役立っている。 ・一般的に聞かれることはスマートホンの弊害やいじめ、また附属中学ならではの問題として親の過度な教育熱心さなどについて問題となっているケースがあります。学校側からの積極的な指針や指導が必要だと思います。 ・H27改善点に「週時程」が上がっているのに、H28には全く出てこない。また、H28内においても一貫性を欠く項目がある。 ・あいさつ+「一言」の取組はどうか。「笑顔」と「上機嫌」が子どもに話しかける基本である。 | ・部活休息日の活用 ・特別支援担当とSCの情報交換を週時程に組み込むことで活性化 ・あいさつ運動 教師からの挨拶+一言運動 |
| 道徳教育 | ・本校の道徳のスタイルを確立する。話し合いが中心になる道徳の時間の創造（道徳的な葛藤のある発問、生徒の生活に則した発問） ・年間実施計画の策定・実施・改定（学年の実態、学校目標、他教科・領域との関連） | ・年間実施計画の見直しを行い、計画表を掲示するなどして確実に実施する。 ・24項目が偏りなく実施できるよう教材資料を購入し、確実に実施する。 ・道徳・学活・総合の切り分けを行い、道徳の場合は内容項目などをはっきりさせる。 ・学年の道徳担当が授業案を提案し、学年共通で実施する。 ・指導主事等研修に多くの教師が参加し、今後の道徳の方向性について理解を深めた。 | ・学年によるばらつきはあるものの、35時間の実施に近づけている。 ・生徒が、自分の生活体験を含めて活発に意見を出し合う授業を多く実施することができた。 ・各学年で年間実施計画を作成し、実施している。学年の実情に応じて、内容項目や資料を随時変更している。 ・学年通信を通じて保護者に授業の様子を伝える試みも行っている。 ・ダイヤモンドランニングやロールプレイングなど多様な手法を取り入れることができた。 | ・生徒が夢中になる授業の1つとして道徳の授業を行えた時間が増加した。 ・計画が実施しやすい時期と実施しにくい時期や学年がある。教育実習期間には実施しにくいのであらかじめ予定を変更しておく必要があった。学年で取り組む行事がある場合も実施しにくいので考慮する必要があった。 ・心情面を養うことはある程度できているように感じられるが、実際の場面でのスキルにつなげて行動を起こせるような生徒を育てるためには道徳の取り組みを通してソーシャルスキルトレーニングが必要だと感じられる。 ・活発に話し合いが行われ、生活の振り返りにつながった道徳教材を次年度に継承し、本校のスタイルの構築につなげる。 | ・道徳の授業公開等、積極的に行っていけると良い。 ・IT社会に向かう中、人間力や豊かな感性を磨くことは忘れてはならないと考える。 ・教育の現場として社会性を身につけさせるということも重要なことであると思います。 ・「はばたけ若者プログラム」のような取組をなぜ三重大学がやらないのか。 ・道徳ほど幼小中の積み上げで効果の出るものはない。 | ・道徳教育担当者の研修 研修会への参加と先進校視察 ・年間時数の確保と実施内容の記録 ・命を大切に教育の推進 |
| 特別支援教育 | ・特別な支援の推進に必要な条件整備を行う。 ・生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、適切な対応を図る。 | ・保護者の了解のもと、個別の支援計画や指導計画の作成を行う。 ・教科の学習において、特別な支援を要する生徒への支援体制を整える。 ・学習支援ボランティアを活用した支援体制の推進を検討する。 | ・各学年で困り感のある生徒を把握し、SCとの情報共有をはかりながら、保護者とともに支援を続けてきている。 ・各学年の情報を生徒指導部会で報告、議論し、職員会議やデーターベースで共有することができた。 ・四附の連携委員会で中学校の現状と抱える課題を報告し、それについて議論することができた。 | ・特別な支援を必要とする生徒の把握は具体的に各学年で行われたが、具体的な手立てが学年まかせになっている。診断名がある生徒については指導計画があるが、その他の生徒の手立てにおいて、学校として方向性が確立されていないことが今後の課題である。 ・四附間で支援・指導計画が必要な生徒の情報交換ができ、課題を共有できた。課題に向けての取組みも始まった。 ・学習ボランティアを活用した支援体制の検討には取り組めていない。 | ・連携を大切に進めていただきたい。 ・ハンディのある生徒へも公平な教育の用意を行なうことは時代の流れでもありますが、健常者自身にも思いやりの心を育てることになると思います。 ・「方向性が確立されていない」→ではどうするのか。 ・大学の心理の先生とは連携できないのか。 | ・教育相談部会を時間割内に設定 個別の支援計画の作成 ・四附属間の連携 特支のセンターの活用 ・学生ボランティアの活用？ |
| 国際理解教育 | ○三重大学の先生との連携 ・永田先生(三重大学)と社会科、英語科が連携し、テレビ会議システムを活用して、シドニーの中学校との同時授業・交流に取り組む。 ・大学に共同研究・視察に訪れた海外研究者、大学への留学生の希望状況により、随時1～2日受け入れ先となり、交流を続けてきた。 | ・「動く!!附中生徒」をキャッチフレーズに、全ての場面において、生徒が主体的に活動できる場面を準備したい。 | ・直接の対話が随時行われるので、計画的なアクションを起こす必要性も感じている。 ・大学との連携におけるシドニーとの交流が、1回だけのお祭りになっているところに課題が見られる。 ・FCSの積極的な活用が課題である。 | ・随時の希望に対し、柔軟に受け入れをしていくことで、特段身構えなくても、普通に(平常心のもとで)外国人と触れ合うことができるので、生徒の異文化交流への意識を高められる。 | ・大学等との連携を武器にさらに進めていけると良い。 ・三重大学付属中学校として、他校にはない特典は外国留学生との接点を持ちやすいということで、このメリットを積極的に活用したいですね。 | |
| 教育相談 | ・日々の学校生活における生徒の悩みを把握し、その解決に向けて各分しよで協力する。 ・不登校になっている生徒への対応とその未然防止の手立てを、各学年団、SC、養護教諭と連携を図りながら進めていく。 | ・教育相談を学期に一度行う。 ・不登校生徒への家庭訪問を定期的に行い、本人、保護者との連携を密にする。 ・不登校生徒の困り感を把握し、SCや養護教諭と連携を図り手立てを講じる。 ・特別支援との連携しながら、困り感のある生徒が不登校にならないよう、その手立てを考える。 | ・教育相談で生徒の困り感を把握し、その対応を担任を中心としながら、各学年で進めることができた。 ・SC、養護教諭と連携することにより、個々の生徒の課題共有ができ、協力して生徒の問題に対応することができた。 | ・不登校になっている生徒への個々の対応は時間的に限られている。他機関と連携を取りたいが、附属はその難しさがある。 | ・関係諸機関との連携はなぜ難しいのだろうか。 ・問題のある生徒、家庭、とだけ限定せずに日頃からのコミュニケーションを持ちたいですね。 | ・部活休息日の設定で生まれてくる時間の活用 |

平成28年度 三重大学教育学部附属中学校 学校関係者評価書

| | 本年度の活動 | 具体的な手立て | 達成状況 | 成果と課題 | 学校関係者評価 | 今後の改善点 |
|-----------|---|---|--|--|--|--|
| 生徒会 | <ul style="list-style-type: none"> 定期的に活動部会を行い、各活動部の活性化を図る。 体育祭や文化祭などで、生徒が主体的に企画、運営をする。 ユネスコや赤十字の団体に関わることで、それぞれの活動に参加する。 「動く！！附中生徒」をキャッチフレーズに、すべての活動場面において、生徒が主体的に活動できる仕掛けをつくる。（附中smile-session等） | <ul style="list-style-type: none"> 昨年度よりも工夫して、主体的に取り組むことができています。体育祭、文化祭等の行事が生徒会を中心として、円滑に運営されています。体育祭では、「安全」を一番に考え種目を大幅に変更した。また、昨年度の種目を継続することで縦割りでのアドバイスをしながら取り組むことができた。文化祭では、生徒会から発表者と受信者の相互のやり取りを大切にしたいという要望があったので全体発表の時間を減らし、午後にブース形式の発表を取り入れた。ブース形式の発表は各活動部会を中心に行った。 生徒が行事に積極的に取り組んでいるスマイルセッションを行った。定期的な開催により、縦割りの意識が生徒の中に出てきた。 | <ul style="list-style-type: none"> 本年度は縦のつながりを通年を通して意識することによって、【スマイルセッション、体育祭等】学年の枠を超えた交流が多く見られるようになった。 挨拶運動を毎日8：05～8：20の間行うことによって、生徒間つながりであったりコミュニケーション作りが活発に行われた。教員もこの活動に参加できるようになるとよい。 スマイルセッション、学校祭縦割りの工夫等担当の先生方には大変お世話になっているが、生徒主体というスタンスは今後も維持されるべきである。 活動部は、取組の内容を工夫し、文化祭ではそれぞれの活動のテーマにそって発表や展示を行うことができた。文化祭の発表は取り組み期間が短時間であったにも関わらず十分に工夫されており、意義が感じられるものであるが、新しくつくった分は旧来からのものを廃止・縮小しないと、教師も生徒もこなすだけで大変になっていくことを危惧している。 様々な新しい取り組みを行っているので、そのための事前の学活等が増えている。授業数との兼ね合いを考え精選する必要がある。 心声箱を設置して、生徒の想いを発言できる場の設定を生徒会主体で行った。 | <ul style="list-style-type: none"> 「動く、附中生徒」をキャッチフレーズに、スマイルセッションなど、生徒にわかりやすい取組を提示して活性化が図られている。特に、学年の枠を超えた学校全体、附属全体の取組が附属生としての意識、誇りに結びついて、効果的な活動になっている。 生徒の主体的な活動を支える教職員の負担があるように思う。行事の精選、活動時間の確保等前向きに取り組んでいく必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 生徒の主体性を伸ばす絶好の機会であり、各行事に意欲的に取り組んでいる様子が見られた。 生徒の自主的な活動を大切に自主性を育てることは重要だと思います。但し、とかくマスコミに左右されやすいものなので、特定な生徒のみや思想的に偏向した状態にならないように気をつけなければならないと思います。特定な意見の一方には必ず反対の意見等の存在を紹介して発想の多様性やバランスを取る必要があります。 前例踏襲となりがちです。「引き継ぎ」という行事がこのことを助長します。 真に主体的な活動となっているのでしょうか？ 育友会も同様に思います。 | <ul style="list-style-type: none"> H Pを活用して情報発信 H29年度生徒会活動方針了承済み |
| 教育環境づくり | <ul style="list-style-type: none"> 校内外の美化に努めることにより、教育環境を整える。 環境教育を実施することにより、生徒の環境浄化に対する意識付けを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> クリーン大作戦を実施することにより、生徒とともに教育環境作りを行う。 体育祭前の除草等の作業を通して、保護者と生徒・教職員が一体となった環境作りを行う。 整備活動部を中心に、日々の清掃活動を丁寧に行い、校内の環境整備を意識する。 | <ul style="list-style-type: none"> クリーン作戦（6／4）（9／3）を実施した。昨年は保護者の参加が少なかったが、今年は多くの方が参加した。 | <ul style="list-style-type: none"> クリーン作戦は、いずれも生徒や教師がしっかり取り組むことができた。保護者の参加も増え、500人ちかい人数での大除草作業となった。 整備活動部を中心に、掃除用具の点検やトイレ用洗剤等の補充を日常的に行うことができた。 | <ul style="list-style-type: none"> 保護者・地域参加もみずえて継続されたい。 自らの環境を自らの労力を使って整えることは教育の意味においても意義がある事だと思います。 | <ul style="list-style-type: none"> 防災の視点で指摘された箇所の改善 職員室の整備と整理整頓 |
| 開かれた学校づくり | <ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会（学校関係者評価委員会兼任）を開催し、学校自己評価・関係者評価の活動を通して、学校運営を見直す。 ホームページや学校通信を通して、保護者や地域の人々に本校の様子を情報提供する。 | <ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会を年3回開催し、学校運営についての意見を集約する。 保護者や生徒、職員に対して、学校教育に関するアンケートを実施し、学校運営に資する。 ホームページを充実したり、学校通信を配付したりすることを通して、学校の様子を情報提供する。 3学期に学校公開デーを開催し、学校を広く公開する。 | <ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会を（6／28、11／28、3／）に実施、いろいろなご意見をいただいた。 生徒、保護者へのアンケートを実施した。結果は、附中通信で保護者に知らせた。 学校公開デーを開催し、開かれた学校作りに努めた。 ホームページの更新を積極的に行い、新しい情報を発信することができた。 | <ul style="list-style-type: none"> 評議員の方に関係者評価をお願いすることにした。また、4附での学校評価委員会でも評価をいただく予定である。 職員、保護者、生徒、各アンケート結果を分析、全教職員で共有して教育内容の充実や保護者支援など、課題を検討し改善策を立てる。 ホームページのカテゴリー分けをすることで見やすくなった。 | <ul style="list-style-type: none"> 積極的な学校の開かれ方の努力がなされていると感じる。 一般社会人として自らが評議員として参加させてもらっていますが、教育現場についてはまだまだ理解、知識、努力が不足している事を実感しています。この評価コメントにしても見当違いな事を記入しているのではないかと思っています。 誰に対して開かれた学校？その目的・目指すところは？が不明確ではないでしょうか。 H Pの改善工夫が必要である。例えば「今日の一言」など、ちょっとしたことでよい。 四附が一緒になって地域に発信していく必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> H Pの更新 ちょっとした工夫で毎日変わる魅力あるH Pづくり 学校日より、学年・学級だよりの発信 学校アンケートやいじめアンケート等の公表 育友会活動の活性化 |